

発言の仕分けに着目したファシリテーターの学習手法の効果の評価

Evaluation of Facilitation Learning Methods Focusing on the Sorting of Remarks in Discussions

新目 紗也^{*1}, 仲林 清^{*1}

Saya Arame^{*1}, Kiyoshi Nakabayashi^{*1}

^{*1}千葉工業大学院情報科学研究科

^{*1}Graduate School of Information and Computer Science, Chiba Institute of Technology

Email: s1732005ee@s.chibakoudai.jp

あらまし：ファシリテーション未経験者に、ファシリテーションの方法を学習させ、実際の議論で活用させることで、チームの問題解決能力を向上させることを目的とした学習手法を開発した。学習は2回に分け、1回目に態度に重点を置いた学習、2回目に知的技能に重点を置いた学習を行った。議論の発言内容を論点提示や制約条件確認などのカテゴリーに分類し、流れを構造化して、学習の効果に与える影響を再評価する。

キーワード：ファシリテーション、問題解決、グループディスカッション

1. 背景と目的

問題解決では、チームで目標を共有して成果を出すことが期待される。本研究では、問題解決のファシリテーション初学者向けの学習手法の開発を行った⁽¹⁾。本稿では、議論の発言内容を論点提示や制約条件確認などのカテゴリーに分類し、流れを構造化して、学習の効果に与える影響を再評価する。

2. ファシリテーターの学習内容

図1に問題解決の過程とファシリテーション技術の対応を示す。ファシリテーションの技術は議論の前に行う「仕込み」と議論中に行う「さばき」に分けられる。「仕込み」の過程では、会議の目的や前提、結論を出すべき論点を設定し議論の骨格を作る。「さばき」は、実際の議論中に、メンバーとの「引き出し、決めさせ、自ら動くことを助ける」コミュニケーションを円滑に行うための技術である。今回は、学習は「さばき」の技術に焦点を当て、ファシリテーターのあるべき姿を学ぶ「態度」と具体的な技術を学ぶ「知的技能」の2回に分けて行った。

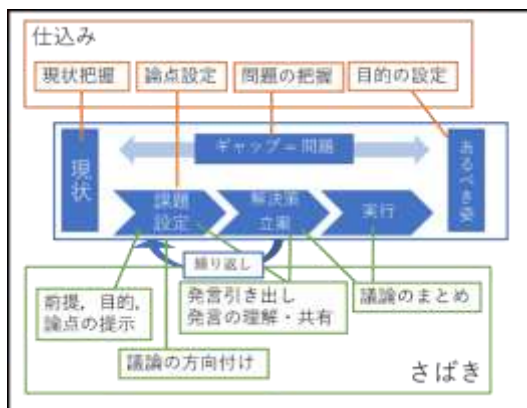


図1 問題解決の過程と
ファシリテーション技術の対応

3. 実験概要

実験の流れは以下の通りである。まず、議論における傾向を把握するために被験者全員に事前アンケートを行い、ファシリテーターを1人選定する。ファシリテーターが態度に重点を置いた1回目の学習を行い、全員で1回目の議論を行う。次にファシリテーターが知的技能に重点を置いた2回目の学習を行い、全員で2回目の議論を行う。

今回は、ファシリテーターの学習で「さばき」の技術に焦点を当てたため、議論の題材を目的が明確で専門知識を必要としない問題解決のタイプとし、予備知識を必要としない課題を与えた。2回とも車を利用した日帰り旅行のプランを立てることを主題とし、議論に参加するメンバー4人は旅行に行き、ファシリテーターは議論にのみ参加する、という設定とした。メンバーに与えた個別の役割はファシリテーター以外に、お互いに内容を知らず、1回目の議論ではメンバー全員に別々の行動の要望と時間的制約の設定を与え、2回目の議論では全員に別々の行動の要望、時間制約、予算の制約を与えた。

4. 発言の分類

議論の流れを構造化するため、議論中の発言を「論点」、「確認」、「推論」、「吟味」の4種類に分類した⁽²⁾。発言の分類と基準、例を表1に示す。

分類のうち、「論点」は話し合う論点についての明確な言及、「確認」は配布資料中の情報やメンバーの要望、制約などの事実について確認する発言である。「推論」は事実を基に自分の考えや解決策を提案する発言、「吟味」は提案や解決策について事実や制約と整合性が取れているかを確認する発言である。

表1 発言の分類・基準・例

分類	分類の基準と例
論点	論点についての言及
	ファ「まずやっぱり、あれじゃないですか、どこから決めた方が良いと思いますか？候補地ですかね」
確認	資料の情報, 条件など事実についての確認
	メンバー3「場所、アクセスのところが、なんか微妙にCの方が良い」
推論	自分の考えを述べる
	メンバー3「それが、できれば午前中に山でバーベキューして、午後に海岸で花火やって帰る」
吟味	推論内容と事実の整合性を確かめるなど
	ファ「確かに、でもこれあれですよ、1日の予定だから、多分それ大丈夫だと思うんですよ」

表2 1回目の議論の進み方の構造

構成要素	詳細
論点	何から決めたいかを問いかける
要望	何をしたいかを問いかける メンバーのやりたいことを引出す どこで行うかに言及, 論点移動
議論 (場所)	メンバーの場所の要望を引き出す 配布資料の候補地情報を確認 候補地どうしの条件の比較 1日で2ヶ所回る推論, 吟味, 決定 候補地の組み合わせ推論, 吟味, 決定 他の要望を問いかける, 論点移動
要望	飲酒についての要望を引き出す 候補地の条件と吟味, 決定
議論 (時間)	時間について決めるかを問いかける 論点が集合時間へ移動
議論 (集合時間)	集合場所についての質問 メンバーの条件の確認 集合→出発までの手順の推論, 決定 目的地までの所要時間を確認 1ヶ所目の到着時間へ論点が移動

5. 考察

1回目の議論の構造を表2に示す。ファシリテーターが論点の決定をメンバー任せにしたり、議論中の発言で論点が変わってしまったりしていた。議論後には「他のメンバーが意見を出し議論を進めてくれたため自分の存在の必要性はなかったと感じた」という発言があった。また、態度に重点を置いた1回目の学習で、ファシリテーターのあるべき姿をイメージさせたが、事後インタビューでは、「じゃあどうやって意見を引き出せばいいんだろう」と自分で考えながら議論を進める必要がありファシリテーションが難しく感じた」と回答した⁽¹⁾。このことから、ファシリテーターはあるべき姿をイメージして議論でメンバーの意見を引き出すことに注力したが、議論の構造を考えたファシリテーションができなかったため、「他のメンバーが意見を出し議論を進めてくれたため自分の存在の必要性はなかったと感じた」と発言したと考える。

2回目の議論の構造を表3に示す。最初に目的とすべての論点を示し、要望や制約を共有した後、個々の論点についてメンバーの意見を引出すという循環を作ることができた。議論後は「用意した論点ごとにメンバーから意見やアイデアを引き出すことを繰り返すことを意識した」ため、議論中にメンバーの発言を仕分けることに集中できてとてもやりやすかったと感じたと回答した。また、知的技能に重点を置いた2回目の学習で、具体的な技術を学習させ、事後インタビューでは「具体的なファシリテーションの技術が示されていてそれを実践しようと考えた」、ファシリテーションを「発言者の意見が整理されることで、発言者以外の人も議論の流れが掴める」ために行うと理解したと回答した⁽¹⁾。このことから、1回目の議論の経験と2回目の具体的な技術の学習により理解が変化し、議論の構造に着目したファシリテーションを行ったと考える。

表3 2回目の議論の構造

構成要素	詳細
目的	議論の目的を提示
論点	用意した論点一覧を提示 話す論点の順番を共有
要望	論点提示 メンバーのやりたいこと, 飲酒, 運転, 終電, 予算の要望を引出す 共有
議論 (場所)	論点提示 候補地の条件と要望の条件を比較, 吟味, 決定
議論 (時間)	論点提示 目的地, 帰宅時間の共有 メンバーの情報から集合場所決定 2ヶ所目の出発時間を問いかける 推論, 吟味, 決定
議論 (1ヶ所目)	論点提示 2ヶ所目到着時間を推論, 吟味, 決定 1ヶ所目の出発時間決定 到着時間を推論, 吟味, 決定

参考文献

- (1) 新目紗也, 仲林清: 議論における発言の仕分けに着目したファシリテーションの学習手法, 教育システム情報学会研究報告 Vol.36, No.1 (2021-5) pp.23-30
- (2) 遠山紗矢香, 白水始: 協調的問題解決能力をいかに評価するか-協調問題解決過程の対話データを用いた横断分析- Cognitive Studies,24(4), (Dec.2017),494-517.